

罪深い女を赦す

ルカによる福音書 7:36-8:3

(そのとき、) あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。そこで、イエスはその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさに分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」

と言われた。同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考え始めた。イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。

すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

説教

長い朗読でしたが、内容を箇条書きにして整理してみます。

- 1) イエスはファリサイ派のシモンに食事に招待された。
- 2) そこに罪深い女 (=娼婦?) が入っていてイエスの足を涙と髪でぬぐいキスして香油を塗った。
- 3) それを見てシモンはあきれた。
- 4) イエスがそれを見抜いてたとえ話をはじめた。
- 5) 借金帳消しのたとえ (50 と 500 の比較、シモンに答えさせている)
- 6) シモンと罪深い女の比較 (足を洗う、キスする、油を塗る、やったやらないという比較)
- 7) イエスの赦しの宣言。
- 8) その女はマグダラの女と呼ばれるマリアだったという暗示。

内容が盛りだくさんですが、かえって、話がばらけている印象です。このバラバラ感の説明として、複数のいいつたえをイエス宣教初期の話としてルカがここにまとめて編集したのだろうという説があります。香油を塗る話はマルコ 14:3-9、マタイ 26:6-13、ヨハネ 12:1-8 にありいずれもイエスの殉

教まぎわの説話です。ルカはなにかの考えがあったのかこの香油の説話を殉教とは切り離してここに記録しました。

マルコを箇所を紹介します（マタイはほぼ同じ、ヨハネも設定がちょっと違うが内容は同じ）

イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」マルコ 14:3-9

登場人物の名前、シモンが共通していて、女の行為を非難する点も似ています。ルカはイエスの伝道のはじめ、ガリラヤ伝道のエピソードとしていますが、ほかの3つの福音書ではイエスの殉教のエピソードとして香油の女の話伝えていています。きょうのみことばにはないので説明は省きますが、重いみことばだけど、現代にあまりつたわっていないことがあります。

世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。

わたしたちはイエスの記念として聖餐をおこなっていますが、香油塗ることを記念として積極的にはとりいれていないことに気づきます。

さて、この女が聖書にはよくでてくる無名の女なのか、それともマグダラの女マリアなのかの詮索はおいておき、きょうの福音のテーマ「罪の赦し」に

移ります。福音に明記されているとおり、女は罪を赦されていますが、ファリサイ派のシモンの罪は赦されているのでしょうか。

イエスはたとえ話を語られています。500 デナリの借金と 50 デナリの借金帳消しのたとえをひいて、どちらの人がより金貸しを愛したかとシモンに問いかけ、彼は 500 デナリの人と答えています。（これも似たような借金のたとえ話がマタイ 18:23-35 にあります。この話では多くの借金を弁済してもらった男が感謝どころか不法を働くという話になっています）それからイエスはシモンに向かってあーだこーだと言いつつ 47 節のことばで締めくくり、女に対して赦しを宣言します。（ヨブ記のラストを連想します）

だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。 新共同訳 7:47

だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。

新改訳改訂 3 7:47

二つの翻訳で 47 節を比べてみました。もとの文章に近いのは新改訳のほうで、新共同訳のほうは意識しています。翻訳はずいぶん違っていますが、どちらも似たような意味になっていて、女の罪の多くは赦されたけれどシモンのほうは少し赦されたといっているようです。赦され方の程度（多い、少ない）は愛で決まるといっています。「わたしに示した愛の大きさ」「それは彼女がよけいに愛した」と表現されています。大きな愛、小さな愛、なんかわかるようでわからない言い方です。

「少し愛して。長く愛して。」これは昔、テレビで放映されていたウイスキー CM のキャッチコピーですが、シモンも頓知を働かしてこのコマーシャルの大原麗子のように返答したらと考えると、どのように展開したのかわく

わくします。このコピーの元ねたはイギリスのことわざだそうです。“Love me little, love me long.”わたしの勝手な想像ですが、このことわざ、いま引用したルカ7:47のもじりじゃないのかなあ？

さて、親鸞はこの問題を「本願ぼこり」として考えました。浄土真宗でいう本願とはお浄土に行くこと、キリスト教的に単純に解釈すれば「救い」です。罪の赦しと置き換えてもいいとおもいます。本願ぼこりというのは、救いは確定しているのだから悪をおかしてもいい、いや悪が大きければおおきいほど救いも大きくなる、とう考え方です。これに対して、毒消しがあるからといってわざわざ毒を飲むのはアホだろ、というようなことって親鸞は否定しています。パウロも同じような事態におちいりコリント教会に対して造悪する人たちを必死に諫めています。マフィア映画で悪党のボスが死に際に神父さんを呼んでくれとって罪の赦しを乞うお決まりのシーンがありますが、これはこれで、なかなか堂に入った本願ぼこりにも思えます。なにしろ悪事に悪事を重ねてきているのですから、赦されたときの感謝も大きいわけです。一概にはいえないのですが、これもダメ男の信仰でしょう。

福音書の中には無名の女は何人か登場します。いずれも救いをもとめる信仰の女として見事に描かれているなあと感じます。長血の女（ルカ8:40-）、カナンの女（マタイ15:21-）あらためて信仰による救いを福音書記事のなかに求めてみると女性が多いように思えます。だいたい男が描かれるのはダメ男です。きょうのシモンも分けるとしたらやっぱりダメ男でしょう。

イエスは女に「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。
ところで、福音の中でこの罪赦された女は一言もしゃべっていません。

イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油のに入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。7:37-38

この行為だけが記録されています。香油の壺を持った女は黙って油を塗りました。ある解説を読んでいたら女はイエスの赦しの宣言の前に、つまり塗油（とゆ）の行為を受け入れたときにすでに罪の赦しがあったといえます。わたしもそのとおりだとおもいます。愛が大きいだ、小さいだ、短い長いのと、つべこべいわずに、自然と行う。違う言い方をすれば自分がやるのではなく、やらされてしまうような感覚、そういうなにかの働きが、香油の壺をもってイエスの足もとに近寄った女にはその時に強く働いたのだとおもいます。そのとき信仰者は感謝と同時におおきな喜びに包まれるのです。
